

スウェーデンの学習サークルと 受講生の意識調査（その ）

野 崎 俊 一

（文教大学付属教育研究所客員研究員）

A Study on Life-long Education and the Consciousness of the Study Circle in Sweden(PART)

NOZAKI SHUNICHI

(Guest Researcher of Institute of Education , Bunkyo University)

要 旨

「スウェーデンは生涯教育国とか教育大国とかいわれる学習先進国だ。その国民生活に重層的に浸透し、国民教育とか、民衆教育とも呼ばれているのが「学習サークル」(注1)。成人教育の中核的組織を占めている。つまり、義務教育を卒業後、再び、「いつでも、どこでも、好きな時に、誰でも自由に学べる」というリカレント教育の最前線の実践機関である。前回の紀要(8号)では、現地で試みたインタビューとアンケートによる意識調査から、その実態はキャリアアップを目的とする「資格・実務型」の傾向が濃いことを検証した。今回はこれを受けた形で学習サークルや条件、受け入れ側の施設整備の五項目について検証してみた。

まえがき

マンパワーのキーワードは教育にあるとの基本理念で諸国に先駆け「学習社会」の継続、維持をめざすスウェーデン。18歳以上の成人人口約550万人の半数を占める国民が何らかの形で成人教育機関(注2)に通学している。教育大国とか教育先進国と言われる所以だ。今回の調査では、前回の動機や成果を中心にした項目に続き、学習サービス(講座の新設、学習活動サービス、施設整備)、奨学資金体制や通学に関する学習条件など五項目の分析を試みた。

この結果、講座については現行の営業時間をさらに延長した夜間講座を希望する者が回

答者中42%に達した。学習活動については更なるガイダンスとともに、施設整備は「自習用のスペースの拡充を望む」ケースが目立った。また、これらの受講に当たっては家族の理解に支えられ、受講時間、料金支払いについても大半の人が「特に問題はない」と答えている。そして、月平均の経費は約9600円だが、国やコミュン(市町村)の公的補助に支えられ、巷間いわれる「学習好きの国民」の一端が浮き彫りにされた。しかし、年間の受講生は経済動向などに左右され、79年以降300万人をピークにここ20年間は280万人台の横ばいが続くなど、[曲がり角のリカレント教育]との指摘もある。また、諸国に見ないほ

どテンポの早い制度的変容に対処しつつ、リカレント教育の象徴でもある成人教育（学習）を推進していくには、回答のなかにも指摘されたように、公的機関の補助金や各種の奨学金制度のさらなる充実が求められるところだ。

意識調査について

A B F（注3）とF U・フォルク（注4）の2団体130人に調査表を配布し、54人から回収した（回収率41.5%）。調査項目は学習機関に対する要望、受講の問題点、学習条件、受講料金（設問文は別項）、属性調査（性別、年齢別、職業別、学歴別）は、性別では女性36人、男性17人、不明1人。年齢別では、「20-30歳」（17人）、「30-39歳」（5人）、「40-49歳」（14人）、「50-59歳」（7人）、「60-69歳」（6人）、「70-79歳」（3人）、「80歳以上」（1人）、不明1人。最終学歴は大卒16人（男性7人、女性9人）がもっとも多く、次いで小卒13人（男性6人、女性7人）と高卒13人（男性2人、女性11人）と同数。あとは各種校卒9人（男性2人、女性7人）、大学院卒3人（全員が女性）。

職業別では会社員がもっとも多い20人（男性7人、女性13人）。次いで学生12人（全員が女性）。無職と年金生活者も同数の12人（男性7人、女性5人）。この他、看護婦4人、主婦1人。配偶者の「あり」は24人、「なし」23人、不明と無回答が7人。（この項は前回の紀要と重複）。

〔所属するサークルに対する希望〕

講座の新設や増設（複数回答61人） 最多は夜間講座26人（男性11人、女性15人）。次いで早朝講座14人（男性3人、女性11人）。3位が旅行・野外活動講座7人（男性1人、女性6人）。以下、学習レベルに応じた講座5人（男性1人、女性4人）、資格付与や技術認定の講座4人（女性4人）、休日講座3人（男性1人、女性2人）、通信・放送講座2人（女性2人）。

性別、年齢別では、男女とも20代と60代以

上の2階層で早朝講座を希望し、夜間講座は中高年層で高い率を示した。このことは、早朝講座については比較的自由的な時間の余裕があり、より有効に使いたためであろう。また、夜間講座を希望する年代の中で、40-50代が職業と学習がバランスの取れた形態を望んでいることが推察される。20代の女性については、相対的に野外講座や資格・技術の取得講座に意欲をみせている。

講座の時間帯については、A B Fの語学講座は午前10時開始、夜間の場合は午後6時台の開始が目立つ。他の芸能、教養講座について見ると、もっとも早い時間は「午前9時」。夜間時間でもっとも遅い開始は、「午後9時45分」。このため、早朝にしる夜間講座にしる、受講生の要望を仮に受け入れるとなると、講師の確保をはじめ、職員の勤務時間の延長に伴う人件費や施設維持のための電気代など諸経費がかさむなど、数多くの問題点をクリアしなければならず、早期解決とはいかないのが実情だ。

3位に学習レベルが位置していることは、スウェーデンの教育事情を反映したものと見える。と言うのは、義務教育の基礎学校（6歳から15歳）の段階では、ゆとり・個性教育主義のもと、個人のレベルに応じた指導が主流となっている。従って学力が劣る児童・生徒は本人が希望すれば特別指導によるカリキュラムが取り入れられてなど、成人教育においてもこのスタイルをうけいれることに抵抗がないのだろう。

逆に意外に低率なのが資格付与や技術認定講座。前回の紀要ではその実態が「資格・実務型」であるとし、今回と矛盾した数字と言える。なぜか。推察すると、前回の調査では学習サークルのほか進学や資格取得を目的とする自治体学習団体のコンブックス、大学を含めた調査の総括だったことがあげられる。もう一点は、こと、学習サークルの受講生は既に各種の資格を履修、取得しているため、

調査対象の受講生には「これ以上必要ない」と思われる。ちなみにこの項をチェックしたのは、短期修学資金を受けながら、外国語、インターネット、心理学の複数講座を学ぶパートタイマーの中年女性や看護婦、大学院生ら。

また、旅行・野外活動講座が資格講座の数字を上回っている。このことは、日常生活行動調査の中で「海外や国内で10日間以上の観光旅行」と回答した人が二人に一人と言う高率からもうなずける。

学習サービスのサービス(複数回答56人)

最多は「十分なガイダンス」が24人(男性9人、女性15人)。男女とも20歳代を中心にさらなるガイダンス、個別指導を求めるケースが回答者半数いるが、この思いは60歳代でも同じ傾向を見せている。

ガイダンスはいわば学習活動の事前の診断にあたるもの。スウェーデンでは基礎学校の段階から個性を大切に考える考えが浸透している。つまり、自己決定権をフルに活用するためには自分で判断すると言う基本能力を年少のころから養っており、それが成人になってからも引き継がれていると言える。学習サークルレベルにおいてもカウンセラーが配属されているが、受講生は現状に満足せず、より以上のサービスを受けたいと思っていることが裏付けられた格好だ。これは「個別指導や助言」が3位11人(男性3人、女性8人)からも分かる。

2位は「職業・アルバイトの紹介」12人(男性1人、女性11人)。スウェーデンの経済動向を理解していないとこの数字には戸惑うとともに、学習サークルが就職の案内サービスまで請け負っていることに訝しがることだろう。しかし、お国柄から何の違和感も抱かない。アンケート時の98年当時の経済事情は、一時の経済不況から脱出する気配はあったが、失業率は8%台の高い数字だった。このため、教員が夏休み中のアルバイトに遊園地でガイドをする光景も見られるなど、定職者であっ

てもアルバイトに精出すことは何も珍しいことではなく、若い世代でもアルバイトの口が見つかることで「ラッキー」と喜ぶほどだ。以下、「ボランティア」6人(男性1人、女性5人)、「本、教材などの紹介や購入」4人(男性1人、女性3人)、「大学など高等教育機関に入学する紹介」と、「成果発表の場の提供」がともに同数3人(いずれも女性)、「グループの学習仲間の紹介」1人(女性1人)。

施設設備の充実(複数回答31人) 最多は「自習用のスペース」12人(男性2人、女性10人)。次いで「情報コーナー」8人(男性1人、女性7人)、「交流の場やサロン」7人(男性3人、女性4人)。以下、「駐車場のスペース確保」3人(男性1人、女性2人)、「託児施設」1人(女性1人)、「高齢者への配慮」はゼロ。

この順位から言えることは、講座の受講にあたって、余裕の時間があれば、予習や復習をしたいという勉強に励む気持ちが非常に強いことがわかる。しかし、現地を訪れ、受講生の三分之一を占める大手のA B Fにしる、比較的高学歴層が多いF Uにしる、教室となる学習場以外の"遊んでいるスペース"は見当たらなかった。このことは、一教室を一日数回転させる効率性の経営面が絡んでおり、受講生が希望するスペースの必要性は分かっている、おいそれと受講生の希望が適えられることは難しいとみた。しかし、受講生にしてみれば、[交流の場やサロン]を希望する数字が比較的高いことから見ても、学習サークルが単に「学ぶ」だけの場ではなく、新たな人間関係の構築の場であることを期待していることが浮かび上がる。

[受講に際しての問題点や苦勞について]

受講時間の確保(複数回答47人) 「とくに問題はない」31人(男性12人、女性19人)で、回答者の65%。この設問は次の設問の「学習条件」と関連することもあってその数字結果に興味ももたれた。結果的には自分に適した時間帯をそれぞれ考えた上でのことな

のだろう、無難な数字になっている。また、「問題あるが工夫して乗り越えている」は、11人（男性1人、女性10人）をあわせると93%の高率。「問題があり苦労している」は5人（男性2人、女性3人）にとどまった。回答者の顔ぶれをみると、年齢層は20-49歳にまたがる。この中には自宅から約40分かけてくる看護婦で大学院生の社会人学生がいるかと思えば、自宅まで10分足らずの23歳の無職男性や自宅から2分の至近距離にいる中年男性が含まれている。この二人がなぜ時間に苦労しているのかは回答からは見えてこない。

受講料の支払い（複数回答47人） 「特に問題はない」が回答者の92%にあたる42人（男性12人、女性30人）。「問題があるが工夫して乗り越えている」が3人（男性1人、女性2人）。「問題あり苦労している」2人（男性1人、女性1人）。

受講料金については公認団体については5人以上の希望者がいれば成立し、学習時間が最低20時間以上などの条件があれば公費負担の対象になる。その負担率は過去の事例を見ると、最高75%。しかし、経済事情によって変動し、現在は受講講座によっても異なるが、おおむね、7割が国とコミュン（市町村）の負担で、残り3割が本人負担。

ちなみに講座価格を見てみると、語学講座では「フランス語」が900クローネ（36回）（1クローネ16円）。1回あたり邦貨に換算して400円の低価格。この他、一括払いによる高価格講座としては「コンピューター」4900クローネ（42回）がある。反面、安価な講座には「絵画」1830クローネ（72回）、「グラスフィク」2300クローネ（72回）。異色講座には「禁煙」800クローネ、「皆に職がある」無料、「申し立てをする権利」500クローネ、コンピューター関係では「精神障害者のためのコンピューター」800クローネ、また、大学と互換単位がある「多分か化社会」400クローネがある。

家族の理解（複数回答45人） 「とくに問

題ない」が職業別、年代世代格差もみられず、断然トップの41人（男性10人、女性31人）。「問題あるが工夫して乗り越えている」3人（女性3人）。「問題があり苦労している」1人（女性1人）。この問題と連動する項目として前回の設問で受講講座してよかったと思う点は何かと問うたところ、「家族との対話が増えた」「家族や友人の尊敬が得られた」「家族が励ましてくれるようになった」と回答した人が、79人中、4割にあたる32人を占めていたが、図らずもこの数字を裏づけていると言えよう。

体調の維持（複数回答46人） 「問題あるが工夫している」と回答したケースは、1人だけ。残り45人が「とくに問題がない」と答えている。福祉先進国であるスウェーデンでは、風邪など不調を理由に職場にいかなかった工場労働者の平均欠勤時間は230時間（1988年度の欠勤時間数国際比較）と、高い。

ちなみに日本は36時間。このことから、「スウェーデン人はすぐ自分を病人にしたがる」と揶揄されるほど勤労意欲については疑問符がつく。しかし、こと「学ぶ」についてはこの数字から判断できないほどの勤勉さが伺えるなど、時間的にも金銭的にも、また、周囲の理解や健康面でも障害度が低いことだ。この恵まれた学習環境があるからこそ、リカレント教育が高いレベルを維持していることが容易にわかる。

[サークルへの通学条件] (複数回答57人)

自宅からそれとも職場からか 自宅からは71%に当たる41人（男性14人、女性27人）。職場からは15人（男性3人、女性12人）の26%、自宅や職場からの併用組が7%の4人、その他1人が含まれている。また、自宅から通学するのに年齢的な格差はないが、50代の有職者が職場からとする率がやや目立つ。

交通機関（複数回答78人） 全体の24%を占めるのがマイカー組の19人。次いで自動車18人、徒歩16人が肉薄している。以下、自転車

13人、その他6人、電車5人、バス1人の順で、バイク組はゼロ。このなかには徒歩、時には自転車など異なった交通手段の併用組20人含まれている。その他の交通機関が比較的高い数字なのは、調査地が国内第2位の都市・イエテボリで市内を走る路面電車の利用によるもの。

所要時間(複数回答18人) 自宅組8人の平均時間は、16分8秒。時間区分でみると、10分未満5人、20分未満2人、30分未満1人。職場から10人の平均タイムは25分5秒。自宅組に比べて約9分余計にかかっている。時間区分では10分未満3人、20分未満4人、30分未満1人、45分未満1人、それ以上1人。ここでも自宅組と同じく、職場に近いサークルの地の利を基準に選んでいることが伺える。

奨学資金の有無について(複数回答57人)

「ある」は15人(男性3人、女性12人)の26%に対し、「ない」が73%の42人(男性10人、女性32人)。公的教育機関と同様に成人教育の段階においても各種の奨学資金援助が充実している現状から見ると、「ある」が「ない」の三分の一にとどまっているのは意外。

「ある」と答えのうち、どんな資金を受けているについては、「短期修学手当」が7人(男性1人、6人)(学習サークルや労働組合学習に出席する労働者が学習のために失う分の収入の収入を補償。年間240時間または通学時間を含めた分に対して支払われ、1時間につき75クローネ。対象科目は国、英、数、社会に限定)のほかは「特別手当」1人(女性1人)(4年以上の労働者か自営業の経験がある者や4年以上10歳以下の子供の世話をしていた経験者。給与金と貸与金からなるが支給額は失業保険金に準じる)の二種類にとどまっている。

設問項目の「下宿手当」(国民高等学校での短期コースに参加する者に対して支払われる。交通費、寄宿代を含む)「稼得補償の日額手当」(各地方自治体で行われる成人の基

礎教育、または移民に対するスウェーデン語教育に出席する者を対象とする時間手当)「労働市場訓練修学援助」(労働市場訓練に参加する者に支払われる補助金)は、いずれもゼロ。

この他、成人が対象のものとしては、「失業のための特別学習補助金」(21歳以上で職安に登録している者が対象。金額は失業保険額に準じる)「失業者対象の教育手当」(職安によって判定)「クンスカ プスリフテット・注5による特別教育手当」、さらに労働組合支給の奨学金がある。

奨学金の額については回答6人のうち、満足が2人で、あとの4人は不満としている。内容的には、不満組では、一ヶ月に2千クローネの給与があるものの、これとは別に5千クローネのローンがあるという女子学生。満足組では子持ちの高卒勤労女子学生(26-30歳)が1年間に6600クローネの支給され、また、ドイツ移民で23歳の無職男性の場合も年間7千クローネを支給されている。ちなみに、教育の基本理念である平等・公平・連帯に基づき、移民もスウェーデン国民と対等に支給されている。

[通学費用について]

修学時までのかかる総額(回答30人) 最多は「1500クローネ以内」が半数の15人(男性3人、女性12人)。次いで「2500クローネ以内」が5人(男性2人、女性3人)「15000以内」3人(男性3人)の順。あとは金額的にばらつきがあるが、設問の最高額である5万クローネの回答が1人。この受講生は中年(30-39歳)の子持ち女性で、職業は調理師。外国語、インターネット、フラワーデザインなど5科目を受講しており、家族が励ましてくれているという。過去には奨学資金を受けている。ちなみに属性調査の日常生活では家事に4時間かかるがテレビは見ず、1日3時間は机に向かうという熱心な受講生だ。

一ヶ月にかかる費用(回答44人) 平均額

は462.5クローネ。邦貨換算で約9250円。これに交通費や教材費を含めた額は594クローネ(11880円)。費用別では上位3位まで見ると、最多は「750クローネ以内」15人(男性4人、女性11人)次いで、「500クローネ以内」7人(男性5人、女性2人)「250クローネ以内」5人(男性2人、女性3人)となっている。

教養・趣味・スポーツ・娯楽にかける費用(回答47人) 398.7クローネ(邦貨7974円)。スウェーデン国民は、一人あたり三つのクラブに属しているといわれるほどクラブ制度が確立している。これを裏づけるように、生活行動の調査では、「映画館や劇所、美術館、音楽などの鑑賞」が全体の85%を占めるのをはじめ、「テニス、ゴルフ、ヘルスクラブなどの会員制のスポーツ活動」(60%)「海外や国内10日間以上の観光旅行」と[スキーやキャンプなどのスポーツのための旅行]を含めた旅行組は実に95%の高い率を見せるなど[学び]と[余暇活動]を両立させている。

(注1)「学習サークル」(Studiecirkel)の名は、1845年にストックホルムで小さな集会があったときに産声を上げた。洋服職人で救貧医師だったエルミン(Ellminn.j)の呼びかけに応じた仲間や軍人、教師、学生、商人ら12人からこの称号を与えられたと言う。現在政府公認は11団体。経営団体は政党、労働組合、禁酒運動、スポーツ、教会と多彩。創立期、理念、特徴については紀要第8号を参照。年間受講生は約280万人。講座数は約29万。科目は宗教、語学、心理学、文学、芸術、工芸、演劇、音楽、歴史、地理、法律、政治、産業・経済、医学、各種のスポーツなど300-400課目の多岐にわたる。ジャンル別では芸術科目で約4割を占め、社会科学20%、語学14%、行動科学10%。

(注2)公教育制度としては原語名称として、Folkhogskola(邦訳名称・国民高等学校=農村青年のための農閑期を利用した寄宿生学校として1868年にデンマークから導入)。全国

に現在147校。99校は民衆運動や団体が母体。残りが市町村のコミュニティで運営。利用者は年間20万人。年齢別では18-24歳が最多、45歳以上が15%を占める。成績は点数制ではなく、教師による学生の学習評価。komvux(一般成人教育=世代間の教育格差の是正やリカレント教育の補完1968年に創立)。教育課程が1200コースあり、働きながら学ぶように編成されている。履修した教科及び修了証書は義務教育、後期中等教育課程と同じ。平均年齢29歳(男性28歳、女性30歳)

この他、Sarvux(知的障害者のための成人教育=1988年から正式スタート)。88年10年間で就学者数が6倍に増え、1997年統計では約4千人。SSV(国民通信制成人教育=設置主体は国)。AMU(職業訓練教育=1945年に失業者対策として設置)。63年からは失業者のほかその恐れのある者も対象に。SFI(移民用スウェーデン語コース)。設置者のコミュニティは移民が滞在許可を受けた時点から2年ないし3年の間、スウェーデン語やスウェーデン社会や労働について学習機会を提供する義務がある。KY(専門的職業教育=高校卒業後の高度な中堅的職業人の養成をめざし、1996年から試験的に実施され、2002年から正規のシステムに)。教育期間1年から3年までと多様だが、中心は2年。高校、大学、企業の相互連携があり、スウェーデンがIT化社会、知識社会へと転換するなかで現れた。公的制度外としては前述のStudiecirkel(学習サークル)やPersonalutbildning(企業内教育)がある。

(注3)ABFとはArbetanas bildning-forbudの略。1912年に創立。労働運動や消費者運動、障害者連盟など約50団体を傘下にする国内最大組織。本部は首都のストックホルムだが、発祥地はイエーテボリ。

(注4)FUとはFolkuniversitetetの略。1942年に創立。語学講座の邦人講師の話だと、「最近の傾向として、英、仏会話コースがもつ

とも人気があるが、バルト三国からの移住者のなかにはスウェーデン語で育っているわが子や三世に母国語を習わせたり、国際情勢を反映してチェコ語、トルコ語に関心を示す人も出ています」と語る。給与体系はこの邦人の場合は時間給。一時間120クローネと安く、これに税金分を引かれると手元にはいくらも残らない。このため、給与だけで生活できるのは講座時間の多い英語コース講師ぐらいとか。また、夏休みなど休暇期間中の給料補償はないシステムだが、「私に限らず、講座を持つことは面白いし、日本に興味を持ってくれることが嬉しく、励みにもなっています」と言うように、ボランティア活動の意味合いが強い。

(注5) クンスカ プスリフテット「Kunnska

〔設問文〕

What do you expect your circle? Please mark or check on the number .

(new or more classes) 1 classes early in the morning 2 classes at night

3 classes holiday 4 classes using radio and TV network 5 field work 6 study at ones understanding level 7 classes with diploma 8 other

(better service of equipment) 1 enough guidance 2 personal man- to-man teaching

3 introduction of educational kits 4 intermediation coming 5 provide occasions for reporting the results 6 introduction of volunteer work 7 introduction of jobs

8 introduction of university (or higher education)

(improvement of educational activity) 1 information 2 space for communication

3 space for self study 4 day care center (for babies) 5 care for elderly persons

6 parking place 7 other (please indicate specifically)

What kind of problems or difficulties do you have at your circle? Answer 1,2,3.

(time schedule) 1 nothing 2 little problem but conquest 3 I have problem

(school fee) 1 nothing 2 little problem but conquest 3 I have problem

(understanding of the family members) 1 nothing 2 little problem but conquest

(health) 1 nothing 2 little problem but conquest 3 I have problem

From where do you go to class?

1 home 2 work place 3 other

What kind of transportation (do you use to go to the class?)

1 on foot 2 bicycle 3 motorcycle 4 train 5 car 6 public bus 7 other

How long do you spend to go to this circle?

From home()minutes from work place()minutes

Did you obtain a scholarship in the past or now?

1 yes 2 no

pslyftet」とは[知識の向上]、バブル経済の崩壊と景気回復を図った政府の失業対策のひとつ。25歳から55歳までの失業者に対して新しい職につくための教育援助をしようというもので、5年間10万人の成人教育の定員を増やし、1997年から2002年までに失業率4%に下げる政策。33億クローネの予算が組まれ、市が、その国家補助金を受け取り、自身で教育を組織するか、あるいは既に存在する学習サークル団体や国民高等学校から「成人教育の定員」を購入する。高校レベルの習得が目標とされているが、いずれにしても、失業率低下のために、失業者を公教育に吸い込むという図式は日本的発想からは理解しにくいかも知れない。

If you answer yes, please answer this question, what is your case?

Please mark or check on the number.

1 special allowance 2 allowance for studying for a short period

3 allowance for lodgings 4 daily allowance from compensation of income

5 your work place financially support and your studying

If you are belonging to education circle, and obtain allowance for studying short period, please answer this question. You are satisfied with the amount of allowance. Please mark or check on the number.

1 yes 2 not enough 3 exactly

What is the maximum cost you can spend for your studying?

(including school fee, and transportation)

How much do you spend a month for studying at present?

参考文献

中嶋 博 『スウェーデンの教育』(学文社、1985)、中嶋 博 『学習社会スウェーデンの道標』(近代文藝社、1994)、岡沢 憲芙 『スウェーデンは、いま』(早稲田大学出版部、1992)、河本 佳子 『スウェーデンののびの

び教育』(新評論、2002)、二文字 理明、伊藤 正純 『スウェーデンにみる個性重視社会』(新評論、2002)、藤井 威 『スウェーデン・スペシャル』(新評論、2002)、黒沢 惟昭、佐久間孝正 『苦悩する先進国の生涯学習』(社会評論社、2000)